

The art of refereeing

いろいろなスポーツでレフリーに係わるトラブルが報じられています。判定に不満顔を顕にするプレーヤーや、不必要と思えるキャプテンの質問から、相手の反則を指摘する不必要な行為などが常習化しているのではないかと思います。ラグビーの望ましい普及発展のためにも、レフリングについてプレーヤーとレフリーの共通理解と協同意識の必要性が痛感されます。共通認識を深まり、観衆にも波及浸透していく時に、更なる楽しいラグビーの創造と感動が広まっていくものと思います。

以前、レフリーのみならずプレーヤーにもレフリングの聖典「The Art of refereeing」は広く読まれました。レフリーに夢を与え、プレーヤーにゲームに対する姿勢を説くものとして重要なものでした。日本ラグビー再生の今日的課題解決の一石として改めて見直す価値はあると思います。

レフリングの聖典「The Art of refereeing」は、レフリングは芸術であると宣言し、精神面と技術面の多くのことを教えています。長い間レフリーだけでなくプレーヤーもこの本を読んでレフリングを理解し、レフリーを理解することによって、積極的にラグビーをすばらしいスポーツとして愛し普及発展させてきました。

ラグビーが世界的なものになり、グローバルイズムのなかで、レフリングも研究議論されて、聖典に加えてレフリーのマニュアルが必要になり出版され、個人指導用の指導所もiRBから出版されました。それぞれ内容に工夫がみられますが、大きくは一連の流れの中のもので、基礎はThe Art of Refereeingにあるということが出来ます。

The RFU Rugby Union Referee's Manual では、興味深い表現をしています。

Some will say that refereeing is an art, some a science -but it is neither. Refereeing is a skill and, like any other skill, it can be taught and learnt.

マニュアルはその冒頭にレフリングは芸術であるという崇高な表現を避けて、現代的に教えられ学び取ることで出来る技術だと身近なものにした点に工夫と意図の一端がみられます。レフリーは夢をもって努力すべきだと説いていることには変わりはありません。

芸術性は個性に裏づけされたものです。個性即ち個人の感性や意志が表現される即ち個人の感性や意志がレフリングに生きて表現されることが芸術性の本質です。ルールそのものの理解をはじめ、公平であることや首尾一貫することなど、教えられるべき基本的な事に加えて、レフリングを芸術として知らしめるための3つの要素が考えられます。

1. 豊かな人間性

服装を始め、その人の風貌や態度

過度の格式や緊張と誇張はプレーヤーにつたわることはマイナスです。

2. ゲーム進行をスムーズにする位置取り

原則的と臨機応変の対応することです。そうすることによってプレーヤーに安心感と信頼感をあたえることができます。おなじことが観衆に対しても言えます。

説明・ジェスチャによってさらに効果を加えることができます。

3. ルールの3つの意志 (equal condition, open play, safety) を具現することをレフリーが志向し実行する。

知恵と精神のこもった笛の強弱とタイミングや、Advantage Law の適用などです。

タッチは小さく、ペナルティは大きく、スクラムは中間ですが、タッチ小さくと一口に言えないものがあります。全員が認める状況と距離の場合は仕方ないまたは当という意味で小さく吹く。同じタッチでも判定を明確にするために大きく吹く必要があります。ペナルティは単的に大きくではなく、厳しく大きくや警告の大きく吹く場合があり、そうでない場合もあるのです。時と場合にあった better と best が要求されるりです。タイミングについては試合開始のキックオフでのノックオン間髪を入れず吹くなど留意すべきでしょう。

レフリーが高く目標を掲げて努力し、プレーヤーはレフリングについての知識と理解を深め、レフリーの努力に対する敬意と協同の精神を持つことによって、みんなでラグビーを楽しむことができるのだということをもう一度考え直すよい機会だと思います。

2005.12.21

西川 義行